様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520103
研究課題名（和文）　日本とアラスカにおけるイコン受容

研究課題名（英文）　Icons in Japan and Alaska

研究代表者
鐸木　道剛（SUZUKI　MICHITAKA）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：30135925

研究成果の概要（和文）：
日本の大主教ニコライ・カサートキン（1836-1912）が育てた日本人イコン画家山下りん（1857-1939）の先駆者のような形で、アレウト・カムチャツカ・クリルの主教インノケンティ（1797-1879）が育てたワシリー・クリューコフ（c.1805-c.1880）というアレウト人画家がいる。今回の調査によって、クリューコフとその周辺のアラスカのイコン画家たちはロシアから将来された原画を忠実に模写したことが明らかになった。これは山下りんのイコン制作態度と同じであり、ニコライはイコン制作に関しても先輩のアジアへの正教会伝道師インノケンティのイコン観を受け継いだと考えられる。8世紀ビザンティンに由来する表象観念が、アラスカと日本に同様に伝えられたことになる。

研究成果の概要（英文）：
Vasily Kriukov should have been the first icon painter in Alaska. In the research of the icons supposed to be made by Kriukov in Unalaska in Aleutian Islands and in St. Michel's Cathedral in Sikta, it has become clear that Kriukov and the icon painters after him in Alaska have copied faithfully the original Russian icons which were brought into Alaska by the Russian missionaries. This attitude is the same with the way Rin Yamashita took when she made icons in Japan after 1889. So it is possible that Nikolai Kasatkin who followed his elder missionary Innokenti Veniaminov also took the same medieval idea about icons established in 787 in the second Nicaean Counsil in Byzantium. This medieval notion was contrary to the modern idea of art with the emphasis upon originality and artists' creation. It is the idea of the representation of the sacred and the beautiful and was preached by Russian missionaries to Asia including Alaska and Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：美術史
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：イコン、クリューコフ、インノケンティ、ニコライ、表象観念、アレウト

１．研究開始当初の背景　　平成13年～14年度科学研究費・基盤研究（Ｂ）

「明治日本に将来されたロシア・イコンの研究」による調査によって、山下りん（1857-1939）の制作したイコンの原画がシトカの主教インノケンティ（1797-1879）の私室で発見され、それを描いた画家V．クリューコフが、アラスカのアレウトのイコン画家ワシリー・クリューコフである可能性がでてきた。また山下りんがイコン制作を学んだのは、伝道師ニコライ・カサートキン（1836-1912）の指導によるが、アレウト人画家クリューコフを指導したのも伝道師で、最初のアラスカ主教区の主教となったインノケンティであり、アラスカと日本における正教会伝道がパラレルであったことが明らかになった。さらにアラスカの初期イコンとしてシトカの主教館の礼拝堂のイコン、そしてエクルトナの聖ニコラス聖堂のイコンとの様式的比較は、「日本とアラスカのイコン：山下りんとアレウト人画家クリューコフ」『揺らぎのなかの日本ン文化』（岡山大学出版局、2009 年 3 月、283-305 頁）のなかで行った。本研究はそれに続くものである。

２．研究の目的

V.クリューコフがアレウト人画家であったことを踏まえて、まずクリューコフの描いた 1826 年成聖のウナラスカの昇天大聖堂のイコンを調査し、さらにそれと同様の図柄で、クリューコフの後継者が制作したとも考えられる 19 世紀のアラスカのイコンを調査する。クリューコフとその周辺のイコンを特定することによって、インノケンティ主教がイコンとともにアラスカにもたらした表象観念の受容について考察する。具体的にはクリューコフを中心とするアラスカにおける表象芸術の導入を、日本における山下りんのイコン制作との関係において考察する。しかしそれはわが国におけるイコンの受容のみならず、そもそも 16 世紀の切支丹時代あるいは開国以来の我が国の近代美術の受容の考察に有力な補助線を与えるものである。

３．研究の方法

船長アンドレイ・ラザレフ（1787-1849）の航海記録によると、クリューコフはアレウト人でペテルブルグ美術アカデミーに入学した画家である。作業はまず現存する作品を調査することから始める。クリューコフは、インノケンティの記録によるとアレウト列島のウナラスカ島出身であり、ウナラスカの1826年成聖の昇天聖堂のイコンを描いている。まずウナラスカ島の昇天大聖堂のイコンの調査を行う。その上で、前回調査済みのシトカの聖マイケル大聖堂と主教館礼拝堂、そしてジュノー、エクルトナとコディアク島の神学校に現存するイコンとの様式的比較を行う。さらにシトカの聖マイケル大聖堂内の聖インノケンティ礼拝堂のイコノスタスにも、初期のアラスカのイコンが掲げられていることが指摘されており、それらのイコンの調査を行い、ウナラスカや既に調査済みのシトカの主教館やエクルトナにあるイコンとの様式的比較を行う。

４．研究成果

山下りんが1893年に『復活』のイコンを描く際にコピーした1876年ペテルブルグ刊行の版画の原画を描いたV. クリューコフという画家が、アラスカのヴァシリー・クリューコフであることは、その原画が、アラスカの最初の主教座のあったシトカの主教館礼拝堂で発見されたことから推測できている。さらにヴァシリー・クリューコフの出身地であるアレウト諸島のウナラスカ島の昇天大聖堂のイコンの調査を行った際、アラスカの他の聖堂ではみつからなかった1889年ペテルブルグ刊行のV. クリューコフ作の聖書物語絵の版画が

６枚も発見された。このことはこのウナラスカ出自の画家ヴァシリー・クリューコフが、1889年ペテルブルグ刊行の版画を描いたV.クリューコフであることをさらに証明する根拠となる。今回はそのクリューコフの作品を位置づけるために、1826年にクリューコフがイコンを描いたと、インノケンティが記しているウナラスカの昇天大聖堂と、それと近い作品と思われるシトカの聖マイケル聖堂でのおそらくクリューコフの周辺作のイコンの調査を行った。その結果、同じ図柄のイコンが、シトカ、エクルトナ、ウナラスカに計5点あることが確認でき、それらの様式の比較により、なかにはロシア製の原画が含まれているかもしれないが、クリューコフ周辺のイコン画家たちについて成立の順序と相互関係が推測できた。

比較例の数が最も多いのはイコノスタスの鷗門に付けられる四福音書記者のひとりのヨハネである。ウナラスカに3点、シトカに2点あり、模写関係にある。シトカのイコノスタス上部につけられているイコンが、最も古様であり、他の4点はそこから模写されたものであると推測できる。おそらくもっとも古様なシトカのイコンがクリューコフの手になるものであろう。記録によると、インノケンティも船長ラザレフも、少年クリューコフは肖像画に優れると記し、ラザレフは、クリューコフ模写のアレクサンドル1世の肖像について記録しているので、他のプリミティヴな4点がクリューコフの制作になるとは考えにくい。ウナラスカの昇天大聖堂は、1826年に成聖されたのち、1856年と1894年に再建されている。シトカの聖ミカエル大聖堂の成聖は1848年であることがわかっているが、画家の生没年の確定など文書館での調査が今後必要である。いずれにしても彼らアラスカの画家たちはロシアから将来された原画を忠実に模写していることが明らかとなり、これは山下りんのイコン制作の全仕事と同じ性格を示す。それはインノケンティとニコライの伝道方針に由来する中世的芸術観と解釈できる。

西洋キリスト教に由来する芸術観のアラスカにおける受容のプロセスと意味の変容は、わが国の 16 世紀以来と近代以来の西洋美術の流入の意味の究明に、有力な補助線を提供するものと考えられる。アラスカだけでなく、アメリカの原住民の文化における「美術」の観念の受容については、アメリカ美術の形成に大きく関わる問題であり、そのことは 1920 年代に西洋のアカデミックな伝統絵画からアメリカが独自の歴史に根差すアメリカ美術を形成するに大きな役割を果たした。その際、わが国の国吉康雄（1889-1953）の果たした役割は大きい。アメリカのカンサス州のウィチタ美術館にあるマードック寄贈の『啓示（Revelation）』（1950 年）は、西洋の表象論に日本出自の国吉康雄は無縁であることの表明と解釈できるのであり、アレウト人によるイコン受容の問題の延長として今後の研究課題である。つまりアラスカにおける表象芸術受容の問題は、わが国における表象観念の受容の問題、そしてアメリカ美術の成立にも関わるトピックであり、表象観念つまりビザンティン 8 世紀のイコンの成立が、世界史のなかで特殊な出来事であったことを示す研究テーマである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

①鐸木道剛、国吉康雄論：東西＜美術＞の融合から＜美術＞の否定へ、東西宗教交流史における表象観念と文化、査読無、2012 年、3-23 頁

②鐸木道剛、Hibutsu: Living Images in Japan and the Orthodox Icons、近代アジアにおける

表象観念と文化、査読無、2011 年、5-24 頁 http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/44671
＜ロシア語訳＞Сокрытый Будда, или живая вещь, in Inter-Esse, Москва, 2011, стр. 54-59
③鐸木道剛、＜不可視の秘仏＞と＜可視のイコン＞、東アジアの＜もの＞と＜秩序＞、査読無、2010年、33-54頁
④鐸木道剛、イコン論と現代、続・神秘の前に立つ人間、査読有、2010年、217-246頁
⑤鐸木道剛、＜もの＞としてのイコン：旧約からの系譜、エイコーン、査読有、第 39/40 合併号、2009 年、18-26 頁

〔学会発表〕（計８件）
①鐸木道剛、「国吉の＜牛＞：表象を超えて」国際シンポジウム「岡山から世界へ　国吉康雄」（2012 年 3 月 11 日、岡山大学）
②鐸木道剛、Latreia and Proskynesis in Russian Culture, in World Public Forum: Dialogue of Civilizations, IX Annual Session（2011 年 10 月 8 日、ギリシア、ロドス島）
③鐸木道剛、Russian Icons through the mirror of Japanese Icons : Icons by Rin Yamashita and Varvara Bubnova, International Conference on Russian Culture and Arts: Tradition and Innovation（俄羅斯文化藝術的傳統與創新）國際學術研討會 議程、驚聲國際會議廳（2010 年 12 月 3 日、台北、淡江大学）
④鐸木道剛、Icon among Idols : Art History in Japan in its context, International Conference ART OF JAPAN, JAPANISMS AND POLISH - JAPANESE ART RELATIONS、（2010 年 10 月 21 日、The Manggha Museum of Japanese Art and Technology、ポーランド、クラクフ）
⑤鐸木道剛「ギリシアとセルビアにおけるポスト・ビザンティン美術研究」『ビザンティン美術の継承』2010 年 9 月 18 日、共立女子大学
⑥鐸木道剛、「1925 年東京：ブブノワのイコンの周辺」、来日ロシア人研究会（「来ロ研」）（第 70 回）例会（2009 年 10 月 3 日、青山学院大学）
⑦鐸木道剛「＜もの＞としてのイコン：旧約からの系譜」東方キリスト教学会（2009 年 8 月 28 日、蓼科）
⑧鐸木道剛、Hibutsu(Hidden Buddha): Living Images in Japan and the orthodox Icons, in Spatial Icons: Textuality and Performativity 国際学会（2009 年 6 月 24 日、モスクワ、美術アカデミー）

〔図書〕（計１件）
鐸木道剛、正教文化圏の修道院文化、『モルドヴァの世界遺産とその修復』、2009年、102-105頁

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕（計２件）
①「＜アメリカ人＞目指した画家、国吉康雄」（『毎日新聞』2012 年 3 月 1 日夕刊）
②「＜生きている絵＞と＜奇跡のイコン＞」（『キリスト新聞』2009 年 11 月 7 日, 2 頁）

６．研究組織
(1)研究代表者
鐸木　道剛（SUZUKI　MICHITAKA）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：30135925